



強行遠足70回記念誌

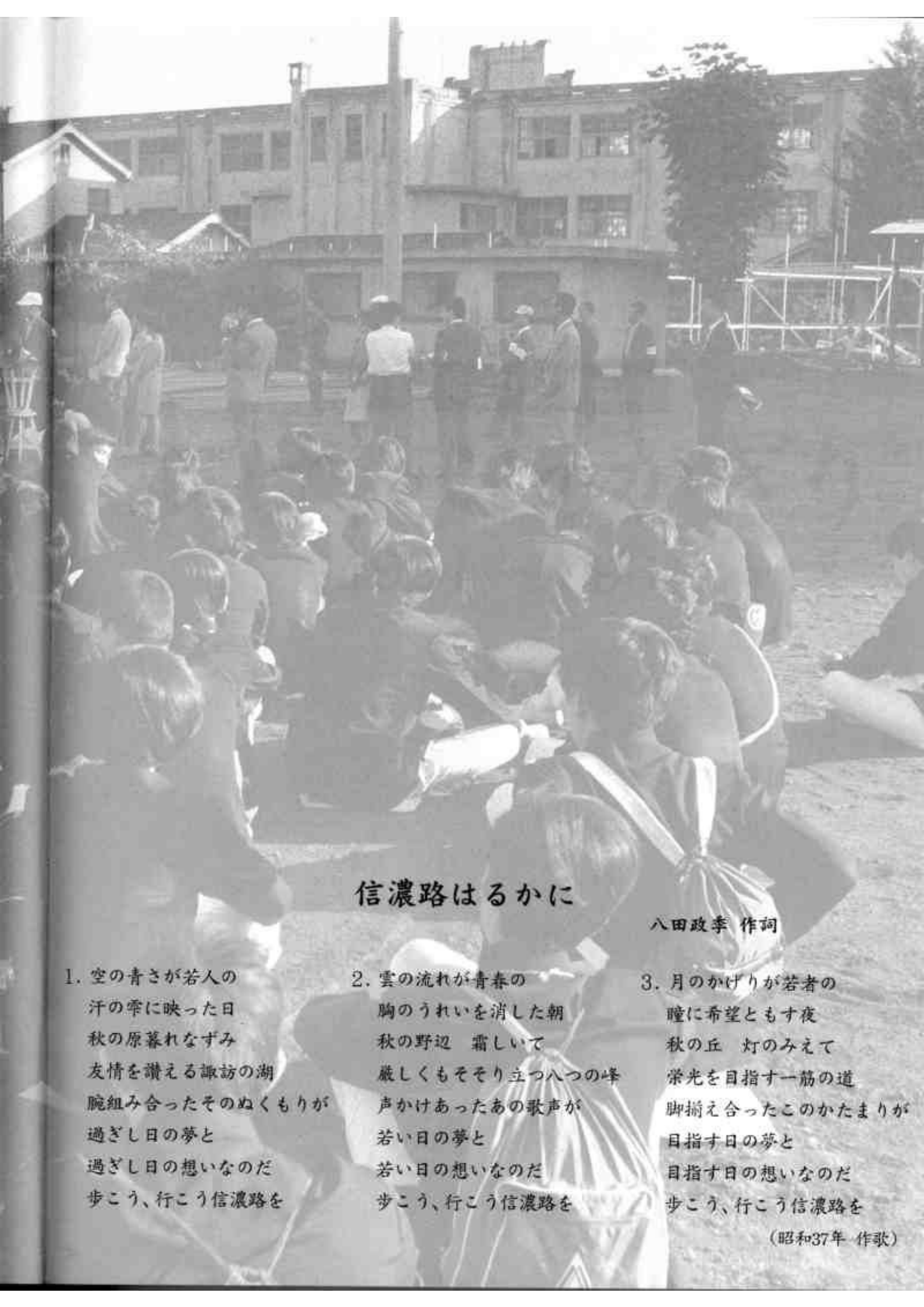
歩け、心のかぎり

1924—1996



山梨県立甲府第一高等学校





信濃路はるかに

八田政季 作詞

1. 空の青さが若人の
汗の雫に映った日
秋の原暮れなずみ
友情を讃える諏訪の湖
腕組み合ったそのぬくもりが
過ぎし日の夢と
過ぎし日の想いなのだ
歩こう、行こう信濃路を
2. 雲の流れが青春の
胸のうれいを消した朝
秋の野辺 霜しいて
厳しくもそそり立つ八つの峰
声かけあったあの歌声が
若い日の夢と
若い日の想いなのだ
歩こう、行こう信濃路を
3. 月のかげりが若者の
瞳に希望ともす夜
秋の丘 灯のみえて
栄光を目指す一筋の道
脚揃え合ったこのかたまりが
目指す日の夢と
目指す日の想いなのだ
歩こう、行こう信濃路を

(昭和37年 作歌)

強行遠足70回記念誌『歩け、心のかぎり1924－1996』

目 次

強行遠足の歌

目 次	1
-----------	---

感動とロマンのはるかなる道	校長 関口 稔夫	3
---------------------	----------------	---

強行遠足のさらなる発展を	同窓会会長 太田源一郎	4
--------------------	-------------------	---

奇跡の第70回強行遠足	P T A会長 遠藤 順彦	5
-------------------	---------------------	---

記念誌発刊に寄せて	小諸市長 小林 俊弘	6
-----------------	------------------	---

歩き続けよ！ 一高生	甲府中学・甲府一高創立117周年同窓会総会 実行委員会委員長 竹越 久高	7
------------------	---	---

第70回強行遠足によせて	P T A保健体育委員長 田中政比己	8
--------------------	--------------------------	---

写真と資料で見る強行遠足70年	9
-----------------------	---

強行遠足の沿革の概要

強行遠足年表	45
--------------	----

強行遠足事始め	49
---------------	----

強行遠足沿革	53
--------------	----

強行遠足70回の記録

コース変遷略図	73
---------------	----

強行遠足練習会コース変遷略図	75
----------------------	----

第1回（大正13年・1924）～第39回（昭和39年・1964）

実施の概要	76
-------------	----

各地到着者数の記録 I	79
-------------------	----

各回の最長到達記録	83
-----------------	----

第40回（昭和40年・1965）～第70回（平成8年・1996）

各地到着者数の記録 II（男子）	85
------------------------	----

各地到着者数の記録 II（女子）	87
------------------------	----

参加率の変遷	89
--------------	----

最終地点到達率の変遷	89
------------------	----

平均走行距離の変遷	90
-----------------	----

変わらないからこそ、貴い ー出発から帰路までー	91
表彰の歴史	99
「強行遠足新聞」より《縮刷》	101
強行遠足Q & A	114
思いを結ぶー強行遠足交流	117
北見北斗高校ー甲府第一高校	
あの頃のこと	153
甲府中学・甲府一高 強行遠足「今昔物語」七十話	195
研究報告紹介	223
平成8年度第70回強行遠足実施状況	
強行遠足全行程図	229
職員組織及び協力者の状況	230
生徒参加状況	230
遠足道中こぼれ話	231
強行遠足体験記「われらかく走りき」	235
アンケート結果	242
強行遠足実施要覧《縮刷》	245
資 料	
「本校に於ける強行遠足の意義と其の実際」	
昭和12年（1937）12月20日《翻刻》	271
根津修蔵「甲府一高強行遠足の概要」	
昭和47年（1972）9月《翻刻》	281
本校の沿革・卒業生数	291
歴代校長	295
学校運営組織	296
強行遠足委員会	296
70回記念誌編集委員会	296
関係諸団体	297
編集後記	299

感動とロマンのはるかなる道



校長 関口 稔 夫

(1) かくして70回大会は

平成8年9月30日、体育館の屋根打つ雨の音はいよいよ激しさを増している。誰もが翌日の「強行遠足」の実施を危ぶんでいた。台風20・21号は洋上から日本列島上陸を狙っている。長野・山梨両県の気象台から取り寄せた天気図を睨み、会議が繰り返される。かすかに明るい兆しはあるが、確たるものは皆無である。しかし、一刻も早く生徒の不安を解消してやりたい。

私は何としてもこの大会だけは、延期も中止もしたくなかった。この70回記念大会だけは、万難を排して成功させたかったのである。「このくらいの雨では、実施する。」集会で私の声を聞いた生徒達は、溜息とも、あきらめとも、喜びともつかぬどよめきの声をもらした。

奇跡は起きた。これこそまさに奇跡であろう。2つの台風とも大きく東にカーブし、遠く太平洋上へと去って行ったのである。夜来の雨も当日午前中には上がり、出発時には薄日さえ差してきた。70回大会の幕はこうして切って落とされた。

大会はいつもロマンを創る。90歳にもならない白田のおばあちゃんは2日間一睡もせず、今や遅しとリングと牛乳を手に生徒の到着を待っている。野辺山のしじみ汁も20数年にわたり生徒のやる気を喚起し、思い出を創造してきた。あのひたすらゴールを目指す生徒の姿は本当に美しい。大自然の中を心を無にして「心のかぎり歩く」姿は、人に感動を与えロマンをかきたてる。「自分の体を運んでいくのさえやっとなのに、仲間を気遣い、横断歩道で待っているドライバーに感謝の会釈をし、渡っていった生徒さん。私は暖かいものがこみ上げ、さっそく33人の担任の子供たちにこの感動を話した。」とわざわざ手紙を下さった長野の小学校の先生。心暖まる生徒のこうした行為こそ、本校「強行遠足」の主旨であり、生きた実践教育である。こうして70回記念大会も多くの人々の支援を受けながら、数々の感動とロマンを残し大成功裡に終了することができた。

(2) はるかなるタスキリレー

「強行遠足」という言葉が初めて使われたのは、大正15年第3回大会からだという。由来は「敢えて強行遠足と名付けたのは、自分の体力に応じて歩けるだけ歩くということを強調せんがためである」から来ている。「この強行遠足という行事の意義は、ゴールに着く着かないということより、むしろ己の力のすべてを出し切る根性と忍耐力があるか、己の力の限界を知ることができるかにあると思います。1つでも次の検印所へ……そういう気持ちで大切ではないかと思います。」(H7卒業生)生徒は大会の意義を見事に捉えている。

小諸・小海までの「はるかなる道のり」。そして、大正13年の第1回から平成8年の第70回大会まで、気の遠くなるはるかなるタスキリレーであった。全国的にもあまり例を見ない豪快なこの大会も、あの千曲川の流れるように紆余曲折を経ながら、途中わずか3回の中止だけで来られたのは、関係者の計り知れない努力と、同窓生・保護者の全面的な支援、そして、生徒の守り通そうとする強い意志があったからに違いない。夜中の寂しい山中でOB達の懸命な演奏、親子二代にわたる検印場所等の無償提供、沿道の人々の暖かい声援等々本当に頭の下がる思いである。

遠く北の国、北見北斗高校との素晴らしいロマンも生まれた。もらったリングをそっと手渡すロマンも「はるかなる道のり」の所産である。生涯の糧とも杖とも指針ともなる壮大な強行遠足。本校の教育の宝として永遠に守り続けて行きたいと切に願ってやまない。

強行遠足のさらなる発展を



同窓会会長 太田 源一郎

母校が誇りとする強行遠足は、大正13年江口校長のときに始められ、最初は東京方面に向かうものであったが、第2回から長野方面と定められた。その後コースに若干の変更はあったが、松本を経て信濃大町方面に向かうものとなった。その後、車の往来がだんだん激しくなってきたので、昭和37年からはコースを三たび変更して小諸方面と定め現在に至っている。

強行遠足の教育的意義はまことに深遠かつ雄大である。歩くことの意義は、

- ①歩くということは最も原始的、普遍的、個性的な運動である。
- ②歩くということは最も自然的な健康法である。
- ③歩くことによって自己の体力、脚力、精神力（根性）の認識を深める。
- ④歩くことは武田流軍学における「健脚強兵」の伝統を継ぐことになる。
- ⑤歩くことによって天地自然の気宇に接して生命力の尊さを知る。などであろう。

代々の学校長はじめ学校当局及び生徒諸君はよくこの行事の意義を認識し、年々この行事の強化充実に努力して、今日第70回目を迎えたのである。

先輩はじめ同窓生諸君は、高校生活の思い出の最たるものは強行遠足であると端的に言う。

まことに強行遠足は生徒たちが精根をかたむけて行う行事であって生徒たちの心の奥深くに、この上もなく強い思い出として残るであろう。

平成4年に、北海道北見北斗高校創立70周年記念行事の一つとして、甲府一高との強行遠足交流が行われた。交流というと国際間のことを考えるが、同一行事を通して山梨と北海道の高校が交歓することは素晴らしいことである。永く続くことを期待したい。

本年は過去をふりかえって記念誌を作るという。まことに有意義なことであって、大いに期待している。

それにつけても生徒たちの強い心のよりどころとする強行遠足がいよいよ充実し、母校がさらに発展することを深く祈念するものである。

奇跡の第70回強行遠足

PTA会長 遠藤 順彦



「会長さん、余程のことがない限り明日は決行しますよ。生徒にも集会を開いてその旨話します。」

電話から校長先生の力強い声が聞こえてきました。記念すべき第70回の強行遠足の実施を10月1日に控えた前日1996年9月30日午後1時のことでした。外は大雨で当日の天気図によると大型の台風21号が南鳥島付近に、20号は奄美大島付近にありました。ここ数日雨が降りつづき、私も含めた多くの方も順延若しくは中止が当たり前だろうと思っておりましたので、この校長先生の決意で私のもやもやは一度に吹き飛びました。おそらく不安だった生徒も大勢いただろうと思います。そうした不安を解消する素晴らしい、また勇気のいる英断だと思います。

私自身も30数年前に一高に学び、強行遠足に参加した経験があります。当時は24時間の間でJ R中央本線松本駅以遠を目指して歩きました。今日のように保護者のご協力をいただいた記憶はございません。いつから今の形態になったか知りませんが、350名近い保護者のご協力をいただき、先生や同窓生合わせて合計500人にならんとする実施態勢を組み、さらに臼田のおばあちゃんをはじめとして、各救護検印所における地域の皆様の献身的なご奉仕から成り立っている強行遠足は他に類を見ない素晴らしい行事ではありませんか。私がPTA会長をお引き受けする時、私の代で強行遠足を終わらせてはならないと密かに決意したものでした。

他校では本校のものに類似した行事において、不幸なことに去年・一昨年と生徒が死亡するという出来事があり、行事の存続が懸念されているやに聞いています。その微妙な時期の第70回強行遠足であっただけに、実施された意味は大きいものがありました。そして天気の方も我々の強行遠足が開始される10月1日の午後より雨が上がり、また終了した2日の午後から雨が降るというまさに奇跡そのものでした。70回の間その時々当事者が苦渋の決断をされたことは何度もあったことだろうと思います。一高の伝統行事が永遠に続くことを願っています。





発行部 記念誌発刊に寄せて



編集 小諸市市長 小林 俊 弘

山梨県立甲府第一高等学校恒例の強行遠足が、昨年で70回目を数え、記念誌を発刊されますことは誠に意義深く、心よりお祝いを申し上げます。

大正13年11月3日の第1回目以来、幾多の歴史を刻み、伝統ある行事となりましたことは誠に喜ばしいことです。この間運営をされてこられました学校当局はもちろんのこと、同意会、PTA関係者各位、生徒が丸となり並々ならぬご努力があったなればこそであり、そのご労苦に対し心から敬意を表する次第でございます。

小諸市民といたしましても毎年秋には、甲府一高の強行遠足を迎えることが、楽しみのひとつとなっております。私も昨年4月市長となり、強行遠足当日、市民会館前で到着される生徒さんを見、感動をいたしました。まさに自分との戦いであり、一晩中ただひたすらにゴールを目指して歩き、自分の状況判断により、自然とのふれあい。苦しいこと、楽しいこと、たくさんの思い出ができるでありましょう。高校時代にこれほど貴重な体験は他にはないと思います。強行遠足での体験が思い出となり、また、これからの人生において必ずプラスになることと思います。

これからも末永くこの強行遠足が続き、ますます盛大に、より多くの成果を上げられることを願うものでありますと共に、関係皆様のもますますのご健勝をご祈念申し上げましてご挨拶とさせていただきます。



歩き続けよ！ 一高生

甲府中学・甲府一高創立117周年同窓会総会実行委員長

竹越久高



同窓生が集えば、決まって強行遠足の思い出話に花が咲きます。

昭和37年、私どもが一高に入学して初めての強行遠足は、交通事情などの理由で松本コースから佐久往環コースに変わった最初でした。夜中の午前0時に学校を出発、やけに寒かった清里を明け方通過し、終点の松原湖にたどり着いて、強行遠足の醍醐味を味わいました。

歴史に残ることは、途中の蒔崎から若神子あたりで、道路沿いの農家のリヤカーを引き出したり、バス停の表示を動かす、「電報だ」と戸を叩くなど、遊び心のつもりが新聞沙汰になったことです。

当時の広瀬校長をはじめ先生方はコース変更にご苦労された上に、悪戯の後始末が大変だったようです。

これが私たちの強行遠足の最大の思い出ですが、若さゆえの過ちと大いに反省もしています。

甲府中学、甲府一高伝統の強行遠足が70回を数えた昨年、昭和40年、同57年卒の私たちが同窓会総会の幹事を引き継ぎました。この節目にあたったことを光栄に思うと同時に、同窓会としてもその歴史を振り返り、記録に止めることが意義あることと考え、学校側と連携して記念誌を作成することにいたしました。

甲府一高に憧れる最大の理由の一つが強行遠足であり、かつて限界に挑戦した同窓生の誇りです。

いうまでもなく、強行遠足は、先生方や父母の皆さんのご苦労はもとより、コース各地の多くの方々などの強力な支えがあってはじめてなします。それも、長い間の積み重ねによって築かれたものであり、この伝統の重みを肝に銘じておかなければなりません。今の時代にこれほどの大行事を新たに実施しようとしてもとてもできません。

生徒諸君が小諸をめざして黙々と歩く様子が報道されるたびに、同窓生は皆注視し、そのうちに目頭が熱くなるのです。

ぜひとも伝統を大事にして、いつまでも歩き続けてほしいと願ってやみません。

第70回強行遠足によせて

P T A 保健体育委員長 田 中 政比己



「台風接近」、平成8年9月30日深夜11時、甲府盆地には相変わらず強風を伴う激しい雨が降り続いております。明日からの強行遠足は延期もしくは中止になるのだろうか、第70回の記念の大会はどのような結末になってしまうのだろうか。多くの人々の心配を嘲笑うかのように風雨は激しさを増していきばかりです。

10月1日朝5時、校長先生をはじめとする先生方の決断が知らされました。力強い言葉で「第70回強行遠足は予定通り実施します。」その決定は前夜、既に意志統一がなされており、如何なることがあろうとも実施するんだという学校側の意気込みが感じられ、とても頼もしくその英断には感服しました。当日は嘘のように天候は回復し絶好のコンディションのなか、男子生徒は小諸へ、女子生徒は翌朝より小海へ向けてスタートを切りました。生徒の顔付き、態度は光り輝いており、精一杯力の限り頑張るぞという強い意志が感じられ、応援せずにはいられませんでした。「頑張れ!!」「元気を出して!!」協力者、沿道の人々の声援に軽く会釈をしていた生徒達も時間の経過につれ、だんだん無表情になっていき、疲労の色が濃く、足取りも重くなっていくのがはっきりわかります。各検印所に到達し、湯茶などの厚いもてなしを受け、また元気を取り戻し、次の目的地まで歩いていきます。この強行遠足によって生徒たちは自己の体力、精神力の限界を知り、校是である「BOYS BE AMBITIOUS」を実感し、これからの人生に役立てていかれることでしょう。この素晴らしい思い出深い強行遠足が、これまで大きな事故もなく継続できたのも、教職員の御尽力に加え保護者、同窓会、その他多くの皆様の温かい御厚意御支援があったからではないでしょうか。一高の伝統ある「強行遠足」がさらに充実し発展することを祈念し、皆様方のお一層の御支援をお願いいたします。

写真と資料で見る強行遠足70年

草創期－松本へ松本へ

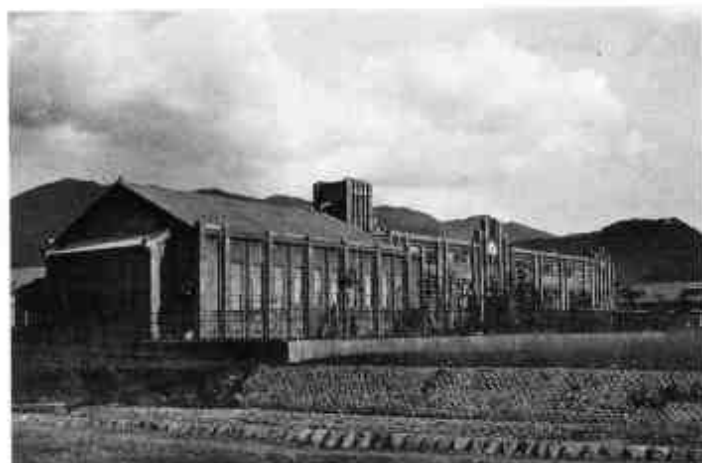
戦後期－日本海に向かって

佐久往還時代

現代まで



佐野智子 画



▲昭和4年(1929)、新築になったばかりの新校舎。



▲校舎から南アルプスの連山を望む。



▲校舎別荘花壇(昭和4年築)。平成3年の(1991)に旧校舎が改築されるまで約60年間前庭を飾った。高城の御主様は旧校舎のあった舞鶴城の太閤様のもの



▲校舎別荘花壇に掲げられた横文。言葉づかいにも温厚な人柄がうかがえる。

中央館上(列車時刻表)

路線	列車	時刻	備考
山陽線	上り	6:15	2:45
	下り	6:35	2:25
	上り	6:55	2:05
	下り	7:15	1:45
山陽線	上り	7:35	1:25
	下り	7:55	1:05
	上り	8:15	0:45
	下り	8:35	0:25
山陽線	上り	8:55	0:05
	下り	9:15	0:00
	上り	9:35	0:00
	下り	9:55	0:00
山陽線	上り	10:15	0:00
	下り	10:35	0:00
	上り	10:55	0:00
	下り	11:15	0:00
山陽線	上り	11:35	0:00
	下り	11:55	0:00
	上り	12:15	0:00
	下り	12:35	0:00
山陽線	上り	12:55	0:00
	下り	13:15	0:00
	上り	13:35	0:00
	下り	13:55	0:00
山陽線	上り	14:15	0:00
	下り	14:35	0:00
	上り	14:55	0:00
	下り	15:15	0:00
山陽線	上り	15:35	0:00
	下り	15:55	0:00
	上り	16:15	0:00
	下り	16:35	0:00
山陽線	上り	16:55	0:00
	下り	17:15	0:00
	上り	17:35	0:00
	下り	17:55	0:00
山陽線	上り	18:15	0:00
	下り	18:35	0:00
	上り	18:55	0:00
	下り	19:15	0:00
山陽線	上り	19:35	0:00
	下り	19:55	0:00
	上り	20:15	0:00
	下り	20:35	0:00
山陽線	上り	20:55	0:00
	下り	21:15	0:00
	上り	21:35	0:00
	下り	21:55	0:00
山陽線	上り	22:15	0:00
	下り	22:35	0:00
	上り	22:55	0:00
	下り	23:15	0:00
山陽線	上り	23:35	0:00
	下り	23:55	0:00
	上り	00:15	0:00
	下り	00:35	0:00

※山陽線列車時刻表(昭和4年)より転載

▲(同右)



▲第4、5回(昭和2、3・1928、1929)のコース本曾街清賀川開所路付近。



▲「旅行満足旅行上の注意」(昭和5・1930)

[illegible]

強行是定印像也出證時間
 月餘二餘部一有柳
 三掛新地傳
 四掛新地傳
 五掛新地傳
 六掛新地傳
 七掛新地傳
 八掛新地傳
 九掛新地傳
 十掛新地傳
 十一掛新地傳
 十二掛新地傳
 十三掛新地傳
 十四掛新地傳
 十五掛新地傳
 十六掛新地傳
 十七掛新地傳
 十八掛新地傳
 十九掛新地傳
 二十掛新地傳
 二十一掛新地傳
 二十二掛新地傳
 二十三掛新地傳
 二十四掛新地傳
 二十五掛新地傳
 二十六掛新地傳
 二十七掛新地傳
 二十八掛新地傳
 二十九掛新地傳
 三十掛新地傳
 三十一掛新地傳
 三十二掛新地傳
 三十三掛新地傳
 三十四掛新地傳
 三十五掛新地傳
 三十六掛新地傳
 三十七掛新地傳
 三十八掛新地傳
 三十九掛新地傳
 四十掛新地傳
 四十一掛新地傳
 四十二掛新地傳
 四十三掛新地傳
 四十四掛新地傳
 四十五掛新地傳
 四十六掛新地傳
 四十七掛新地傳
 四十八掛新地傳
 四十九掛新地傳
 五十掛新地傳
 五十一掛新地傳
 五十二掛新地傳
 五十三掛新地傳
 五十四掛新地傳
 五十五掛新地傳
 五十六掛新地傳
 五十七掛新地傳
 五十八掛新地傳
 五十九掛新地傳
 六十掛新地傳
 六十一掛新地傳
 六十二掛新地傳
 六十三掛新地傳
 六十四掛新地傳
 六十五掛新地傳
 六十六掛新地傳
 六十七掛新地傳
 六十八掛新地傳
 六十九掛新地傳
 七十掛新地傳
 七十一掛新地傳
 七十二掛新地傳
 七十三掛新地傳
 七十四掛新地傳
 七十五掛新地傳
 七十六掛新地傳
 七十七掛新地傳
 七十八掛新地傳
 七十九掛新地傳
 八十掛新地傳
 八十一掛新地傳
 八十二掛新地傳
 八十三掛新地傳
 八十四掛新地傳
 八十五掛新地傳
 八十六掛新地傳
 八十七掛新地傳
 八十八掛新地傳
 八十九掛新地傳
 九十掛新地傳
 九十一掛新地傳
 九十二掛新地傳
 九十三掛新地傳
 九十四掛新地傳
 九十五掛新地傳
 九十六掛新地傳
 九十七掛新地傳
 九十八掛新地傳
 九十九掛新地傳
 一百掛新地傳

[illegible]

▲「準備分担割」
「わらじ係・天候調査係」などの分担が見える



▲最も古い大正15年（1926）から昭和8年（1933）までの成績概



▲実施後の経費精収書。お菓子・しじみ汁・茶料などの文字が見える。(昭和6・1931)

詳察情下秋令土暖氣和清涼樂於農作
 三月間丁未歲十二月四日元記安項
 一過水校士使推行龍足骨行數寸
 可基路路一五二八道一十寸四寸
 於中教相書以授及仰錄錄也
 十二月八日
 山梨縣立學新中學校長
 謹啟
 四


『歩け、心のかきり』／草創期—松本へ、松本へ 11



▲校門前の出発風景（午前0時）

強行遠足 昭和十一年十月廿日

遂に有明迄

松本到着は僅かに十八名

甲府中學生の意氣

（既述）甲府中學校の強行遠足は、四日午後九時、松本駅より、甲府方面へ向かう。松本駅に集合した生徒は、約五百名に達した。出発前、校長の訓話があり、生徒は意気揚々と出発した。途中、雨に降られ、道も悪く、大変な苦行であった。午後七時、上野原に到着した。ここで、生徒は休息をとり、再び出発した。午後八時、甲府に到着した。しかし、到着した生徒は僅かに十八名に過ぎなかった。残りの生徒は、途中で脱落したか、あるいは遅れて到着したのか、は不明である。この遠足は、甲府中學生の意気と、強行遠足の精神を代表している。

△五年大代千崎△同田川川口△四年上田豊太郎△同豊田昌吉△同田田四郎△五年藤田幸徳△四年大木夏男△同大木金三△五年川口康夫△同川口豊高△四年立川正次△五年秋山健雄△同藤田一△四年中村康幸△五年大須賀清男△四年細田清雄

△四年生 藤田幸徳 意気は芳村村中、藤田幸徳を母上、藤田幸徳で、手紙を受けたが、一瞬となつた。田川川口は、水ぎの如く、流れた。

△四年生 藤田幸徳 意気は芳村村中、藤田幸徳を母上、藤田幸徳で、手紙を受けたが、一瞬となつた。田川川口は、水ぎの如く、流れた。

▲「信濃民報」（昭和十一年十月廿日・1934）。「遂に有明迄」の字が長野県民の演説の気持ちを代表している。

賞状

第四学年 藤島仁郎

右者本年體育目三
舉行とル本校強行
遠足ニ於テ其成績
拔群ナキ之ヲ表彰ス

昭和十一年十月六日
甲府中學校

▲川岸まで80kmを踏破したことを証する。

昭和9年(1934)から13年(1936)までの成績簿。▶

表開時車汽用足遠行強校學中府甲

行面方府甲上		行面方府	
行面方府甲上	行面方府	行面方府	行面方府
1. 甲府中學校	2. 甲府中學校	3. 甲府中學校	4. 甲府中學校
5. 甲府中學校	6. 甲府中學校	7. 甲府中學校	8. 甲府中學校
9. 甲府中學校	10. 甲府中學校	11. 甲府中學校	12. 甲府中學校
13. 甲府中學校	14. 甲府中學校	15. 甲府中學校	16. 甲府中學校
17. 甲府中學校	18. 甲府中學校	19. 甲府中學校	20. 甲府中學校
21. 甲府中學校	22. 甲府中學校	23. 甲府中學校	24. 甲府中學校
25. 甲府中學校	26. 甲府中學校	27. 甲府中學校	28. 甲府中學校
29. 甲府中學校	30. 甲府中學校	31. 甲府中學校	32. 甲府中學校
33. 甲府中學校	34. 甲府中學校	35. 甲府中學校	36. 甲府中學校
37. 甲府中學校	38. 甲府中學校	39. 甲府中學校	40. 甲府中學校
41. 甲府中學校	42. 甲府中學校	43. 甲府中學校	44. 甲府中學校
45. 甲府中學校	46. 甲府中學校	47. 甲府中學校	48. 甲府中學校
49. 甲府中學校	50. 甲府中學校	51. 甲府中學校	52. 甲府中學校
53. 甲府中學校	54. 甲府中學校	55. 甲府中學校	56. 甲府中學校
57. 甲府中學校	58. 甲府中學校	59. 甲府中學校	60. 甲府中學校
61. 甲府中學校	62. 甲府中學校	63. 甲府中學校	64. 甲府中學校
65. 甲府中學校	66. 甲府中學校	67. 甲府中學校	68. 甲府中學校
69. 甲府中學校	70. 甲府中學校	71. 甲府中學校	72. 甲府中學校
73. 甲府中學校	74. 甲府中學校	75. 甲府中學校	76. 甲府中學校
77. 甲府中學校	78. 甲府中學校	79. 甲府中學校	80. 甲府中學校
81. 甲府中學校	82. 甲府中學校	83. 甲府中學校	84. 甲府中學校
85. 甲府中學校	86. 甲府中學校	87. 甲府中學校	88. 甲府中學校
89. 甲府中學校	90. 甲府中學校	91. 甲府中學校	92. 甲府中學校
93. 甲府中學校	94. 甲府中學校	95. 甲府中學校	96. 甲府中學校
97. 甲府中學校	98. 甲府中學校	99. 甲府中學校	100. 甲府中學校

▲「強行遠足用汽車時間表」(昭和6年・1931)松本から帰ってくるには4時間ちょっとかかった。

掲載紙、年月日不明。左は小野まで踏破したことを証する。(昭和十一年・1936) ▶



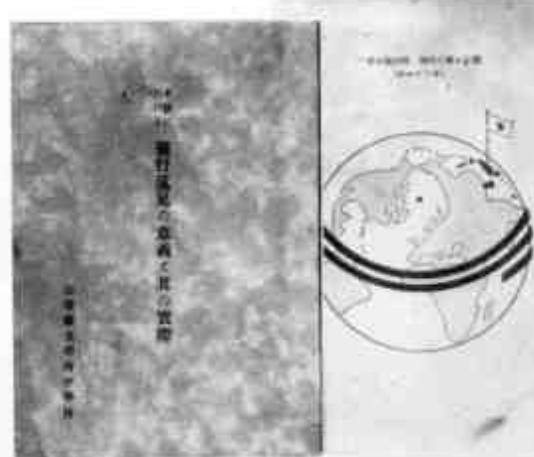
▲山梨から長野へ入ると最初の集落が馬木。強行遠足実施の時機は柿の実がすずなりの候だった。(昭和18年頃・1943)



▲参加の生徒たち(昭和18年頃・1943)



▲麦茶を飲む。小野・砥野間(昭和18年・1943)



▲「本校に於ける強行遠足の意義と其の実際」(昭和12年刊・1937)



▲出発風景(昭和18年・1941)



▲昭和16年(1941)の松本到着者



◀優秀賞(昭和16・1941)

▶ 昭和16年まで継続した表彰状。(昭和16年・1941)



『歩け、心のかぎり』／草創期—松本へ、松本へ— 13



▲校門を出て予行演習に。



▲美咲橋を渡る。うしろに校舎。



▲ブラタナスの道を走る。



予行練習会



▲長野県葛木。馬とすれちがう。



記録映画より
第20回
昭和18年(1943)



▲瀬沢大橋義通橋印所。



▲同左。橋印を持つ。



▲にぎり飯で腹ごしらえ。



▲わらじをはきかえる。



▲5年もちがう上級生と。



▲ゲートルを巻き直す。



▲汽車に杖を振る。帽子を振る。



▲橋印所で、まず敬礼。



▲甲府に備る。松本駅か。



▲甲府駅前で。



▲大野校長から賞状を受け取る。



戦後期—日本海に向かって



▲出発前の集い—正面玄関前（昭和21・1946）



▲一路松本へ（昭和21・1946）



◀松本到達の勇士（昭和21・1946）



◀つかのまの休息



◀予行練習会の今福利重氏（当時2年生・昭和27年卒）、強行遠足に6回参加。合計走破距離は640.0kmに及んだ。うち5回まで全校3位以内という快挙をなした。詳細は「あの頃のこと」に。

賞状

第一学年

今福利重

右八本年行ッタ本校

第三十回強行遠足ニシテ

成績優秀デアルヨツテ

コレヲ表彰ス

耳留留リ後ニ線松本驛至二三軒

昭和二十一年十二月二十四日

出羽県立中津川高等学校校長 近藤光雄

賞状

第二学年

今福利重

右八本年體育日ニ舉行

シテ本校第一ニ回強行

遠足ノ成績優秀ニツキ

之ヲ表彰ス

一日行路中府下ニ線松本驛至二三軒

昭和二十二年一月三日

出羽県立中津川高等学校校長 近藤光雄

賞状

第二学年

今福利重

右者本年施行ノ母校第二十三回

強行遠足ニ當リ類書成績ニ收メ

二年生ノ新記録ヲ樹立セリ

仍リ賞品ヲ贈リ之ヲ表彰ス

昭和二十二年十二月一日

山形県立中津川高等学校校長 近藤光雄

同窓会理事長 芳澤留治郎



▲上諏訪付近（同右）



▲登美付近（昭和23・1948）



重崎救護検印所（同右）▶



▲松本到着の生徒（昭和23・1948）



「併設中学」の名称。学校名が「甲府中学」から「甲府第一高等学校」とかわり、近隣校長の位階勲等も取れている。

賞状
昭和第二学年
今福利重
右ハ本年行ッタ本校
第三十三回強行遠足シテ
成績優秀デアルヨツテ
コレヲ表彰スル
重崎市立第一高等学校校長 近藤良彦
昭和二十三年十月三日

賞状
第一学年
今福利重
右のものは本年行ッた本校
第二十四回強行遠足シテ
成績優秀であるにより
これを表彰スル
重崎市立第一高等学校校長 近藤良彦
昭和二十四年十月二日

賞状
第二学年
今福利重
右のものは本年行ッた本校
第三十五回強行遠足シテ
成績優秀であるにより
これを表彰スル
重崎市立第一高等学校校長 近藤良彦
昭和二十五年十一月一日



▲昭和26年入学式。セーラー服の女子の姿が見える。共学は昭和23年（1948）から。



▲藤原校長もゲートルで号砲。



▲穴山橋付近（昭和25・1950）。この年、初めて女子が参加した。



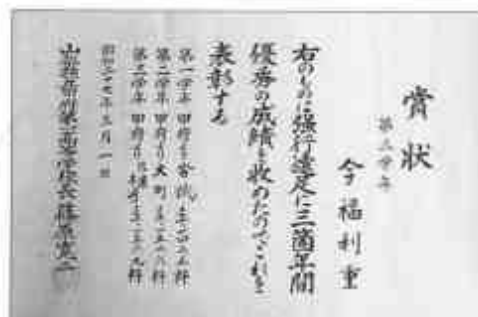
▲出発風景（昭和25・1950）



▶ 強行遠足参加章（昭和25年・1950）



▲昭和22年7月(1947)「甲中たより」—新憲法施行記念号 記念行事として(強歩練習会)が実施された。



記録映画より 第26回 昭和25年(1950)



▲検印カードを受け取る(昭和25・1950)



▲千松橋を渡る。



▲甲府湯村常盤ホテル前を西へ。



▲出発直後の校門前。



▲松本救護検印所。



▲荏碓の本通りをひた走る。



▲荏碓救護検印所。ヒシヤクで水を飲む。



▲信濃大町。篠原校長が生徒を抱きかかえて迎える。



▲秋にすがりととぼと歩む。心配そうに見送る先生。



坡長

21年12月

第二十一回 强

○出陣まで、**大乱**上
上段計で二十三分、下段計で二十八分程度する新記録を以て

(昭和二十一年十月二十九日施行) 山陽縣立

[illegible]

▲昭和21年(1946)12月「甲中たより」

甲府一高新聞

山梨県立
甲府第一高等学校
校長 島田 武
教務主任 山田 三三
庶務主任 内田 三三
市町会 市町会 三三
新聞部 又 新聞部

強行遠足特輯號

傳統を誇る強行遠足
反省すべきもの
なしとせず



強行遠足に 得るもの

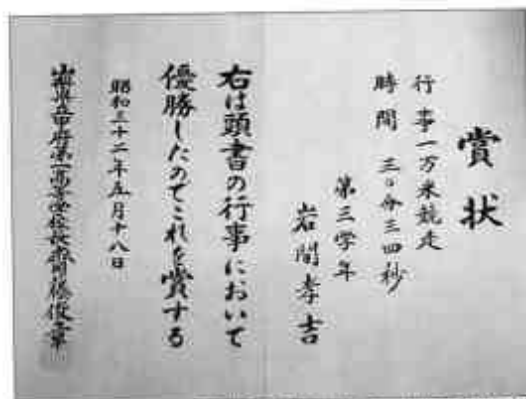
（一） 強行遠足は、甲府一高の特色である。毎年、十一月の下旬に、生徒は遠く山梨県内各地へ遠足に出かける。これは、単に身体を鍛錬するためだけでなく、自然を愛護する心を養うためでもある。遠足を通じて、生徒は自然の美しさを体験し、心身を共に鍛錬することができる。また、遠足は、生徒同士の絆を深める機会でもある。遠くまで歩くことで、お互いの力を合わせ、協力して進むことが必要になる。これは、社会生活でも必要なスキルである。強行遠足は、甲府一高の伝統であり、生徒にとって大切な経験である。

学年	氏名	性別	学年	氏名	性別
1年	山田 太郎	男	2年	田中 次郎	男
1年	田中 次郎	男	2年	佐藤 三郎	男
1年	佐藤 三郎	男	2年	鈴木 四郎	男
1年	鈴木 四郎	男	2年	高橋 五郎	男
1年	高橋 五郎	男	2年	山本 六郎	男
1年	山本 六郎	男	2年	中村 七郎	男
1年	中村 七郎	男	2年	小川 八郎	男
1年	小川 八郎	男	2年	大野 九郎	男
1年	大野 九郎	男	2年	三浦 十郎	男
1年	三浦 十郎	男	2年	山口 十一郎	男
1年	山口 十一郎	男	2年	佐々木 十二郎	男
1年	佐々木 十二郎	男	2年	渡辺 十三郎	男
1年	渡辺 十三郎	男	2年	森 十四郎	男
1年	森 十四郎	男	2年	松本 十五郎	男
1年	松本 十五郎	男	2年	石川 十六郎	男
1年	石川 十六郎	男	2年	清水 十七郎	男
1年	清水 十七郎	男	2年	山崎 十八郎	男
1年	山崎 十八郎	男	2年	高木 十九郎	男
1年	高木 十九郎	男	2年	中村 二十郎	男
1年	中村 二十郎	男	2年	小川 二十一郎	男
1年	小川 二十一郎	男	2年	大野 二十二郎	男
1年	大野 二十二郎	男	2年	三浦 二十三郎	男
1年	三浦 二十三郎	男	2年	山口 二十四郎	男
1年	山口 二十四郎	男	2年	佐々木 二十五郎	男
1年	佐々木 二十五郎	男	2年	渡辺 二十六郎	男
1年	渡辺 二十六郎	男	2年	森 二十七郎	男
1年	森 二十七郎	男	2年	松本 二十八郎	男
1年	松本 二十八郎	男	2年	石川 二十九郎	男
1年	石川 二十九郎	男	2年	清水 三十郎	男
1年	清水 三十郎	男	2年	山崎 三十一郎	男
1年	山崎 三十一郎	男	2年	高木 三十二郎	男
1年	高木 三十二郎	男	2年	中村 三十三郎	男
1年	中村 三十三郎	男	2年	小川 三十四郎	男
1年	小川 三十四郎	男	2年	大野 三十五郎	男
1年	大野 三十五郎	男	2年	三浦 三十六郎	男
1年	三浦 三十六郎	男	2年	山口 三十七郎	男
1年	山口 三十七郎	男	2年	佐々木 三十八郎	男
1年	佐々木 三十八郎	男	2年	渡辺 三十九郎	男
1年	渡辺 三十九郎	男	2年	森 四十郎	男
1年	森 四十郎	男	2年	松本 四十一郎	男
1年	松本 四十一郎	男	2年	石川 四十二郎	男
1年	石川 四十二郎	男	2年	清水 四十三郎	男
1年	清水 四十三郎	男	2年	山崎 四十四郎	男
1年	山崎 四十四郎	男	2年	高木 四十五郎	男
1年	高木 四十五郎	男	2年	中村 四十六郎	男
1年	中村 四十六郎	男	2年	小川 四十七郎	男
1年	小川 四十七郎	男	2年	大野 四十八郎	男
1年	大野 四十八郎	男	2年	三浦 四十九郎	男
1年	三浦 四十九郎	男	2年	山口 五十郎	男
1年	山口 五十郎	男	2年	佐々木 五十一郎	男
1年	佐々木 五十一郎	男	2年	渡辺 五十二郎	男
1年	渡辺 五十二郎	男	2年	森 五十三郎	男
1年	森 五十三郎	男	2年	松本 五十四郎	男
1年	松本 五十四郎	男	2年	石川 五十五郎	男
1年	石川 五十五郎	男	2年	清水 五十六郎	男
1年	清水 五十六郎	男	2年	山崎 五十七郎	男
1年	山崎 五十七郎	男	2年	高木 五十八郎	男
1年	高木 五十八郎	男	2年	中村 五十九郎	男
1年	中村 五十九郎	男	2年	小川 六十郎	男
1年	小川 六十郎	男	2年	大野 六十一郎	男
1年	大野 六十一郎	男	2年	三浦 六十二郎	男
1年	三浦 六十二郎	男	2年	山口 六十三郎	男
1年	山口 六十三郎	男	2年	佐々木 六十四郎	男
1年	佐々木 六十四郎	男	2年	渡辺 六十五郎	男
1年	渡辺 六十五郎	男	2年	森 六十六郎	男
1年	森 六十六郎	男	2年	松本 六十七郎	男
1年	松本 六十七郎	男	2年	石川 六十八郎	男
1年	石川 六十八郎	男	2年	清水 六十九郎	男
1年	清水 六十九郎	男	2年	山崎 七十郎	男
1年	山崎 七十郎	男	2年	高木 七十一郎	男
1年	高木 七十一郎	男	2年	中村 七十二郎	男
1年	中村 七十二郎	男	2年	小川 七十三郎	男
1年	小川 七十三郎	男	2年	大野 七十四郎	男
1年	大野 七十四郎	男	2年	三浦 七十五郎	男
1年	三浦 七十五郎	男	2年	山口 七十六郎	男
1年	山口 七十六郎	男	2年	佐々木 七十七郎	男
1年	佐々木 七十七郎	男	2年	渡辺 七十八郎	男
1年	渡辺 七十八郎	男	2年	森 七十九郎	男
1年	森 七十九郎	男	2年	松本 八十郎	男
1年	松本 八十郎	男	2年	石川 八十一郎	男
1年	石川 八十一郎	男	2年	清水 八十二郎	男
1年	清水 八十二郎	男	2年	山崎 八十三郎	男
1年	山崎 八十三郎	男	2年	高木 八十四郎	男
1年	高木 八十四郎	男	2年	中村 八十五郎	男
1年	中村 八十五郎	男	2年	小川 八十六郎	男
1年	小川 八十六郎	男	2年	大野 八十七郎	男
1年	大野 八十七郎	男	2年	三浦 八十八郎	男
1年	三浦 八十八郎	男	2年	山口 八十九郎	男
1年	山口 八十九郎	男	2年	佐々木 九十郎	男
1年	佐々木 九十郎	男	2年	渡辺 九十一郎	男
1年	渡辺 九十一郎	男	2年	森 九十二郎	男
1年	森 九十二郎	男	2年	松本 九十三郎	男
1年	松本 九十三郎	男	2年	石川 九十四郎	男
1年	石川 九十四郎	男	2年	清水 九十五郎	男
1年	清水 九十五郎	男	2年	山崎 九十六郎	男
1年	山崎 九十六郎	男	2年	高木 九十七郎	男
1年	高木 九十七郎	男	2年	中村 九十八郎	男
1年	中村 九十八郎	男	2年	小川 九十九郎	男
1年	小川 九十九郎	男	2年	大野 一百郎	男

強行遠足記録

（二） 強行遠足は、甲府一高の特色である。毎年、十一月の下旬に、生徒は遠く山梨県内各地へ遠足に出かける。これは、単に身体を鍛錬するためだけでなく、自然を愛護する心を養うためでもある。遠足を通じて、生徒は自然の美しさを体験し、心身を共に鍛錬することができる。また、遠足は、生徒同士の絆を深める機会でもある。遠くまで歩くことで、お互いの力を合わせ、協力して進むことが必要になる。これは、社会生活でも必要なスキルである。強行遠足は、甲府一高の伝統であり、生徒にとって大切な経験である。

（三） 強行遠足は、甲府一高の特色である。毎年、十一月の下旬に、生徒は遠く山梨県内各地へ遠足に出かける。これは、単に身体を鍛錬するためだけでなく、自然を愛護する心を養うためでもある。遠足を通じて、生徒は自然の美しさを体験し、心身を共に鍛錬することができる。また、遠足は、生徒同士の絆を深める機会でもある。遠くまで歩くことで、お互いの力を合わせ、協力して進むことが必要になる。これは、社会生活でも必要なスキルである。強行遠足は、甲府一高の伝統であり、生徒にとって大切な経験である。



▲練習会を兼ねた1万メートル競走(同右)



▲出発の大鼓をうつ副校長(昭和32・1957)

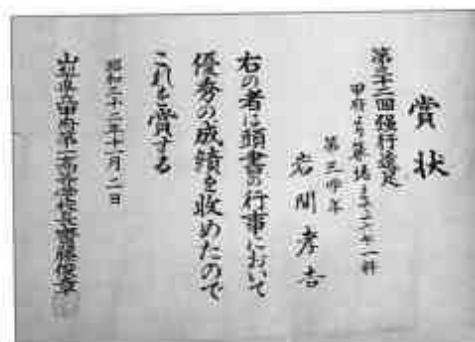
▲職員用の「強行遠足要項」(右同)



▲女子も元気に校門をスタート(同右)



▲校門をスタート(昭和32・1957)



▲岩間孝吉氏は24時間制の時代の最長の到達記録保持者である。167.1km(筑後)



▲昭和32年(1957)の記録映画より



▲赤十字をつけた救護車は昭和初期より使われた。(昭和32・1957)

▼最長到達記録賞の置時計(昭和32・1957)



(岩間孝吉氏蔵)



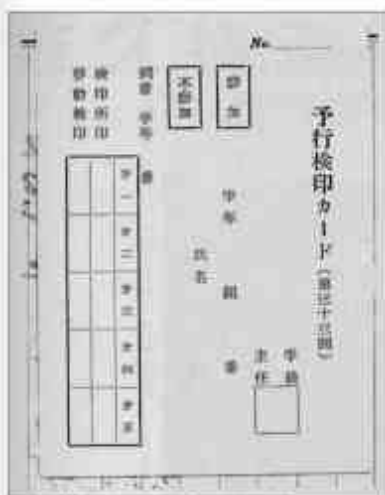
▲記録映画より一先生がついて、杖2本ついて。



▲築城駅標



▲岩間孝吉氏(当時3年生)「あの頃のこと」参照



▲予行検印カード (昭和32・1957)



▲創立八十周年記念章 昭和23・1958



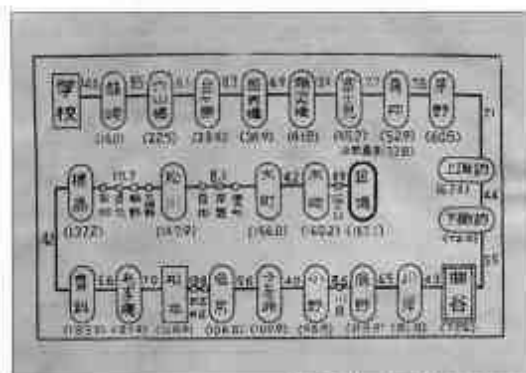
▲ (昭和35・1960)



▲旅行遠足要項 (昭和35・1960)



▲霧の中を歩く



▲検印カード (昭和35・1960)



▲地下足袋をはいてみたが



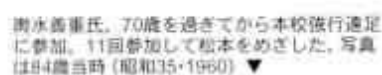
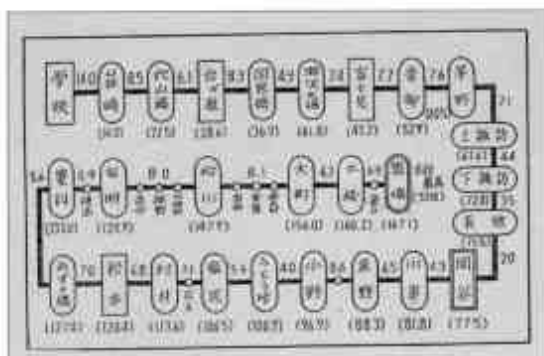
秀吉の気持ち ▶



▲タスキをもって一緒に歩く女子



◀ 学校優勝杯。昭和33、35年頃は学校の合計記録距離を競った。右：女子、左：男子。34年は伊勢湾台風で中止。



つて生徒会の行事ではない。従つてこれは学園側の責任においては定まるの三あつて、生徒が責めを

[illegible]

写真は前年36年（1961）のもの



▲ 脚行讀足要語 (昭和37・1962)



▲昭和37年の強行遠足は清里でフ
ォークダンス、うどん、ミルクな
どを提供し、走ることを禁じた
が、生徒は清里にとどまること
もなく、終点の松前までめざし
た。

[illegible][illegible]

強行遠足

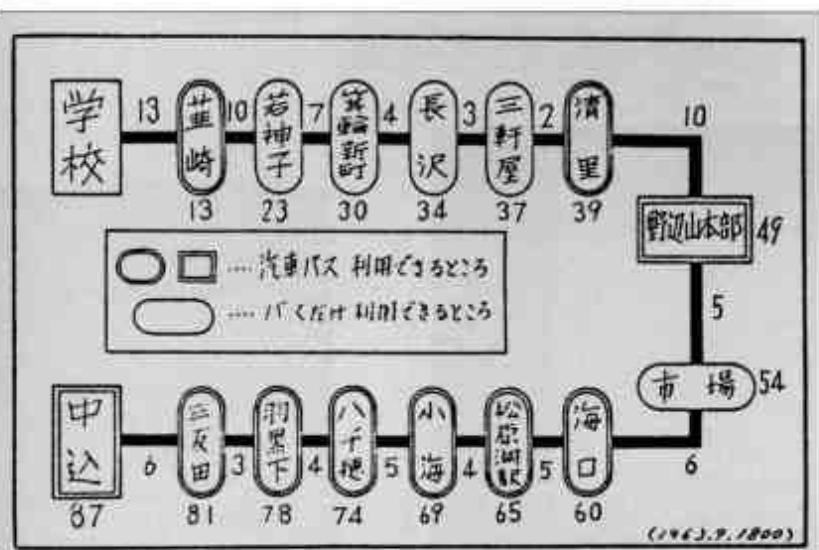
る三三三と一五五とつづいてゐることに屈したが、西條生田は強ひて思ひ出にこの車までなつたのである。

男子は、同じ九月廿一日に一應休養を命ぜられた。ところが、この時、胃腸を患へた。ところが活動的な生活の癖を生きて、先づいふにこればかり、無理難題であつた。

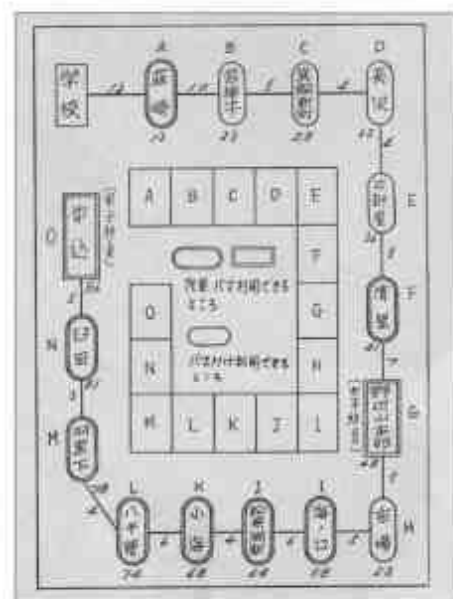
[illegible]

「二年生の中には「小賢者」に育たなかった。」という声がある。人間はまだ成長を続けていると、だが、三年生のY君は「この健康講座によってつけられた精神からは、健康の長い人生に近づけた感じがする。」と語ってくれた。

▲甲府一高新聞（昭和38・1963）

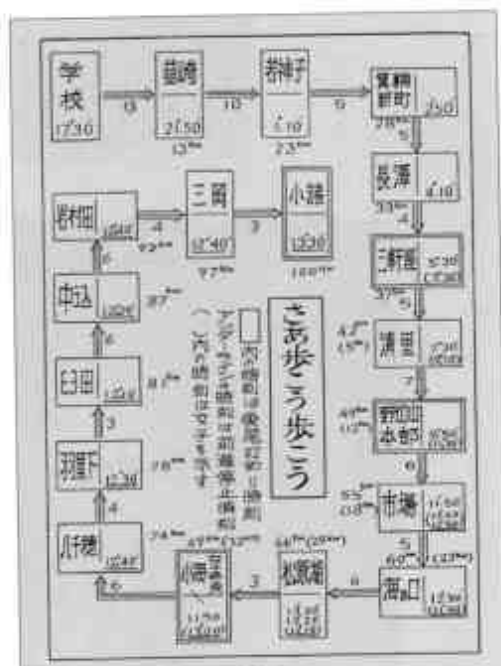
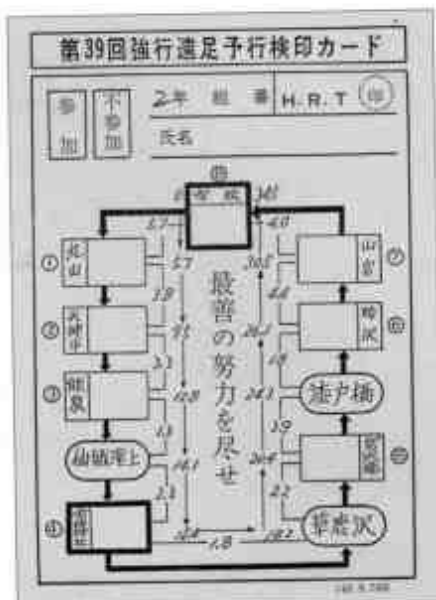


▲搜印力一下（同上）



▲横印力一斗(同上)



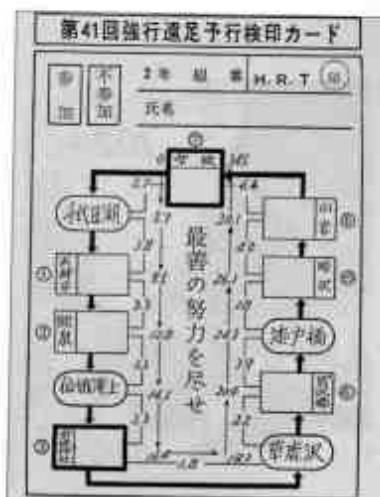




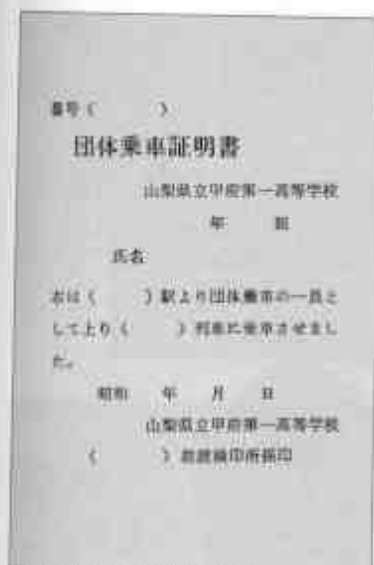
▲強行遠足予行実施要覧一生徒用（昭和41・1966）



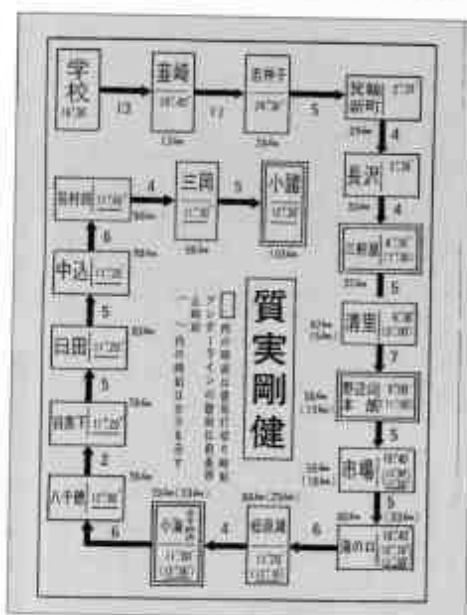
▲予行検印カード裏面—予行コース



▲強行遠足予行検印カード（昭和41・1966）



▲国鉄（現JR）団体乗車証明書



▲検印カード



▲高原を行く女子（同右）



▲校園を一直に出発する男子（昭和41・1966）



▲校門を出る男子（同上）



2004年12月12日
三聯郵政總局

佐久新報 昭和42年4月5日（毎月3回・16・20日発行）

善意はうつくしい
高校生の強行軍めぐる話

[illegible][illegible]

れた道標がやうにわが村に、
 冬の間、道田と文春二兄弟の
 ぼんち、同様に、学校や生徒
 あつた。いふ所、松取村に年輩
 松がたつた。さういふ、松田
 さん夫婦は、八月になれば学校が
 ふたたび開くところだつた。親心
 で田舎をしてあげた。さうい
 うが、千太郎は、おぼろけ、こ
 の銀行東を呼ぶやうにしてい

▲「佐久新聞」昭和42年（1967）
4月5日

信州民報

昭和44年10月21日(火曜日) 第6229号 昭和44年10月10日

火皇人

[illegible]

韓文公

[illegible]

►《信州民報》昭和44（1969）10月27日

▼三軒堂をスタートする女子（昭和45・1970）



▲創立九十周年記念参加費
(昭和45・1970)



图 1 1990 年 10 月 1 日 12 时 00 分 10 分钟雨量等值线图

▼「甲府一高新聞」(昭和46・1971)

メダルめざして
ふえた小諸到着者

強行遠足

林は警察行事の多い季節である。その数多い行事の中に、自衛の力の限界を知るための、土曜日の朝、警備隊と合同で、市民会として警備隊足がある。去年も十月六日、七日と実施された。

この車前一高の警備隊足も、中止された時はあったという。土曜日の朝、警備隊と合同で、市民会という長い間になたてて行な

コウスは例年通り、男子小頑
張者も多く、女子を圧するもの生
徒が小海に多い。



小諸へ一番で聞いた小林隆石（三年九嗣）は、その時の感想を「一生懸命がなばった。一番にな



小諸へ一番で着いた小林 隆吉
 (三年九組)は、その時の講話を
 「一生懸命がんばった。一番にな
 れてうれしいよ」とことは少な
 かっていた。また女子の一番は河
 西麗美さん(二年七組)である。
 去年は一年の創立九十周年記念
 でもあったので、参加者全員にメ
 ダルが配られた。メダルの価格は
 次のようである。

小諸	純銀	三二〇円
中込	純銀	二二〇円
少海	銅制	八五円
野辺山	ブロンズ	七〇円

女子小僧と云はれた。 男子は六日の午後四時に、三車生が出席し、十分おきに三車生、一車生と順に出発した。男子の参加人数は全日制、定額制、通信制、P・A、卒業生合わせて九百六十三名であった。その内、小諸到頭者は二百六名におおむね、その中にはP・A、卒業生の割合が大きい。	この一席の諸司通足の諸君と云ふは、全国的にも珍らしく長く続いていることと、その間、一つの事故も起らないことである。
この一席の諸司通足の諸君と云ふは、全国的にも珍らしく長く続いていることと、その間、一つの事故も起らないことである。	續編 二四九

女子は、日暮朝、三軒家までハエで行き、そこから七時ごろ出発した。女子の参加人数は、全・定ころした関係、難江通屋の在り方について考え直さなければならぬ。

薩門海尾。その歴史を刻みつけたのは、尾に突きだすマメと並べ、そしてPTAの心づくしのおむすびに、暖かいお茶であった。昔と今全くいじりつた体輪は、決して元氣なくないことだろう。残れきりの体輪にかけられた講師のこぼきは、無言に表わせない位の感謝を吐き、これからは、自分の足で歩みたい、これからは、自分から進みたい、これは思われる不正行為をなす学生達に、強く語りたいことである。

長くもあり、短くもある生のノートのページに、この薩門海尾の足によって忘れられない何かを遺すを希求しておく。これも大切な薩門海尾の習義ではないだろうか。



▲佐久往還十周年記念参加章（同上）

No. (101) (乙)

乗車区間 小 諸 → 甲府



No. () (甲)

101
 山梨県立甲府第一高等学校
 強行連立団体乗車
 会 員 券

乗車駅 小 諸 → 下車駅 甲府

1. この券は甲府と小諸間の乗車に用いてください。
2. この券は乗員の乗車の有効と乗車料の半額を証明して用います。
3. この券では旅行券に準ずるものではありません。
4. 旅行券に準ずるものとみなすには乗車券と乗車料の半額を併せてください。

山梨県立甲府第一高等学校 後 援 団 体 印

小 諸 新 製



▲ 团体会员单位



◀ 海の口到達記念章（昭和49・1974）

▼機幕(昭和50・1975)

小諸なる古城のほとり
意気高く勇士よ進め!!

甲府一高 年 組 番

氏 名

5.1

海の口
22.0
17.40
17.40

少 海
72.9
17.00
17.00

田園通
68.3
12.00
12.00

海の口
67.8
11.00
11.00

市 場
57.1
26.3
9:29 11:00

5.4

八千穂
98.2
12.00
12.00

養天地化育

群登山本部
51.7
20.9
7:50 11:00

4.1

4.5

養下
82.2
19.00
19.00

小 籠
100.04
17.00
17.00

清 菜
44.5
19.7
6:10 10:00

3.3

4.6

白 梅
85.5
12.00
12.00

三 角
130.4
12.00
12.00

三 軒 家
39.3
9.1
9:30 8:30

4.7

3.8

中 込
50.2
17.00
17.00

新村岡
86.7
11.00
11.00

養 沢
26.1
5.3
2:27 7:30

4.3

5.3

甲府一高
24.0
18.30
18.30

葛 輪
16.5
10.1
10.1

新種子
26.0
22.30
22.30

5.2

英輪船部
31.8
6.30
6:30

高田黒小
24.0
5.40
5:40

正方形のたわくの横と縦辺を受け取る。わくの内側面は前後無段階である。その下の（ ）内はONは前進停止時刻である。

▲棒印力一十(昭和49・1974)



▲拍手で小諸に迎えられる(同右)



▲もう歩かなくていい(同右)



▲たき火で暖をとる(昭和50・1975)



▲男子の終点小諸到達記念章(同上)



▲女子の終点小海到達記念章(同上)



▲朝日の中を女子が行く(同上)



▲OB発行通足のゼッケン。

NHKテレビ		NHK教育テレビ	
00 05:00 17:00 07:00	00 ロシア語講座	6	
01 成吉思汗の冒険	01 数学講座・自然科学	7	
02 05:00 17:00 07:00	02 赤子の村づくし「近代	8	
03 スポットライト「アニ	03 映画と音楽研究」	9	
04 ーさん」の巻」黒田雄	04 金沢聖廟・通称太郎	10	
05 05:00 17:00 07:00	05 稲の「コンヒニエンス	11	
06 05:00 17:00 07:00	06 ストア」奥田正徳	0	
07 05:00 17:00 07:00	07 宗教の時間「人と仏		
08 05:00 17:00 07:00	08 花光一也 亀井清		
09 05:00 17:00 07:00	09 セサミストリート		
10 05:00 17:00 07:00	10 パートの不思議な真		
11 05:00 17:00 07:00	11 マーブル・ワニ。ム		
12 05:00 17:00 07:00	12 ある精神療養病		
13 05:00 17:00 07:00	13 施設の話 橋本久雄		
14 05:00 17:00 07:00	14 コミュニター講座		
15 05:00 17:00 07:00	15 「障害にならべる・分		
16 05:00 17:00 07:00	16 動」森田繁一		
17 05:00 17:00 07:00	17 05:00 17:00 07:00		
18 05:00 17:00 07:00	18 05:00 17:00 07:00		
19 05:00 17:00 07:00	19 05:00 17:00 07:00		
20 05:00 17:00 07:00	20 05:00 17:00 07:00		
21 05:00 17:00 07:00	21 05:00 17:00 07:00		
22 05:00 17:00 07:00	22 05:00 17:00 07:00		
23 05:00 17:00 07:00	23 05:00 17:00 07:00		
24 05:00 17:00 07:00	24 05:00 17:00 07:00		
25 05:00 17:00 07:00	25 05:00 17:00 07:00		
26 05:00 17:00 07:00	26 05:00 17:00 07:00		
27 05:00 17:00 07:00	27 05:00 17:00 07:00		
28 05:00 17:00 07:00	28 05:00 17:00 07:00		
29 05:00 17:00 07:00	29 05:00 17:00 07:00		
30 05:00 17:00 07:00	30 05:00 17:00 07:00		

若者には「よい、どん」22時(100キロレース)と聞かれて、10名でドキュメンターが放送された。(同右)



▲「若者にはよい——よい、どん——22時(100キロレース)と聞かれて、10名でドキュメンターが放送された。(同右)



▼ゼッケンに捺印を推す恩師(同右)



○8日による親睦歩大会(昭和52・1977)



めざせ小籠へ
甲府一高・創立100周年記念
「フット」誌（昭和55・1980）下の写真も



女子の出席を待つ女子（昭和55・1980）



▼甲府一高100周年記念特別番組「歩め！世代をこえて」（昭和55・1980）



▲扉を組んで一緒にゴール（小海・同上）。



▲日田森羅校印所。前列中央は依田トミ子さん（同上）。

▼松原湖義経校印所の京屋商店（小池電太郎氏宅）現在と違い、松原湖入口のT字路の店舗を校印所にお借りした。（同上）



▶記念章（昭和55・1980）



▶ゴールした生徒と握手する副校長（同左）。



▲同右

▶「第4回甲府中学・甲府高OB進行遠足—嗚呼青春の道—」(昭和55・1980)
9チャンネル招待席



▲最高を越え

▲白田



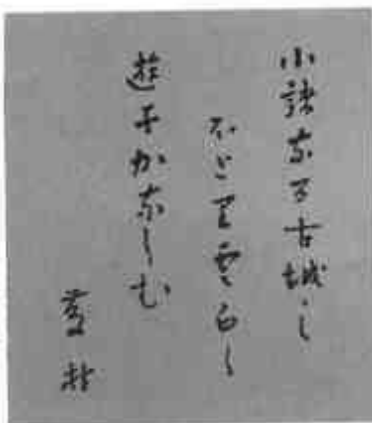
▲百周年を迎えた母校

創立百周年



「第4回甲府中学・甲府高OB進行遠足—嗚呼青春の道—」(昭和55・1980)
9チャンネル招待席

▶小諸への上位別進者に小諸市長(当時)塩川忠三氏から贈られた色紙



▲参事



▲検印カード(昭和40・1965)

◀夕闇せまる校舎



▲麦茶を飲んで



▲記念章（岡石）



（佐久往瀬強行遠足20周年記念誌）（昭和56・1981）



▲臼田教護検印所。



▲音楽部OBによる激励演奏・野辺山。
一晩中、校歌・応援歌を演奏する。

野辺山教護検印所。右
端：丸山良雄氏。左か
ら二人目：岡部勝男氏。
（昭和56・1981）▼



手を取り合ってゴール▶



▶迎朝



▲小諸で一巻の生徒を迎える岩波校長
（昭和56・1981）

（信濃毎日新聞）（昭和56年10月8日・1981）

信濃毎日新聞

おなじみ健脚
さかなな戸屋

長野県新聞界の発展を期し、信濃毎日新聞は、この秋、創立50周年を記念して、県内各地で「さかなな戸屋」を開催する。このイベントは、県民の健康増進と、県内各地の観光振興を目的として行われる。参加者は、さかなな戸屋の魅力を体験し、健康増進を図ることができる。また、県内各地の観光資源についても紹介される。このイベントは、県民の健康増進と、県内各地の観光振興に大きく貢献する。参加者は、さかなな戸屋の魅力を体験し、健康増進を図ることができる。また、県内各地の観光資源についても紹介される。このイベントは、県民の健康増進と、県内各地の観光振興に大きく貢献する。

発行所
信濃毎日新聞社
長野本社 〒380
長野市南條町 607番地
電話大代026234-4151

松本本社 〒390-01
松本市宮田 5番10号
電話026325-2151
松本支社 026325-2153

心信濃毎日新聞社1981年

昭和56年（1981年）10月8日



▲「青春の群像」



▲先導の機車

君よ走れ
新たな歴史を
創る道程
(右銘文)



▲銅像製作「強行遠足の像」——制作期間——
(昭和60年10月・1985)



▲野辺山本部設置 (昭和59・1984)



▲検印所名義を吊る (昭和59・1984)



▲連れはてて



▲小笠原にて (昭和61・1986)



▲野辺山本部 (昭和61・1986)

28 『歩け、心のかぎり』／現代まで



▲創立105周年・強行遠足60回記念式典であいさつをする塩川小諸市長
(昭和60年10月22日・1985)



▲創立105周年・強行遠足60回記念文庫・バッジ (昭和60・1985)





▲小諸到着者と望月校長（同右）



▲女子出発前の体操・高根東小学校（昭和63・1988）



▲激走のあとで～小諸（同右）



▲松原站（昭和63・1988）



▲笑顔で小海にゴール（昭和63・1988）



▲小諸到着者と握手する望月校長（昭和63・1988）



▲同右



▲TBS・ギミアブレイク「徹夜で走れ！102キロの青春」（平成元年10月・1989）



女子、埼玉小学校をスタート



▲同右



▲NHK「青春すくらんぶる・ドキュメント102キロを走り抜け」(平成元・1989)より

持ち物・服装

3年生の時、健康状態は良好、自分のペースを守って走った。普段陸上部の練習で1日に10kmから20kmを走っていた。服装は体育着で、靴は陸上用の底が厚いクッション性のあるものを履き、靴下は土ふまずの所がフィットする物を履いていたので、靴ずれが親指の所に少しは出たが、血まめは無く、また足もつれることがなかった(松田早苗さん談・平成2年卒 海ノ口コースの最高記録者)。

※現在、男子の服装は白田警察署の指導により、全員夜光反射付タスキを使用し、帽子とズボンの裾に夜光テープを使用して、夜間の安全歩行に万全を期している。(平成8年度 1996「第116回同窓会記念誌」より)



▲同上

「こんなふうに思つた人は沢山い
るだろう。無職、貧乏、その中の
一人であるが、本道に、一歩と進
歩のようなきがらあつてはならない

[illegible][illegible]

◀ 白雲生處



▲ 正統路路



▲「健全なる精神は健全なる肉体に宿る」－体育館前庭



▲校舎解体！ うしろにプレハブの仮設教室が見える。(平成4年9月・1992)



北見北斗高校



▲一高生、北見北斗高へ（平成4・1992）



▲あいさつする高森校長



▲北見の土地を走る



▲北見北斗高生、一高へ（平成4・1992）



甲府一高（63年）
山口 公太郎



北見へ



甲府へ

ローカル・ニュース
より



強行遠足交流 北見北斗高 甲府第一高



▲女子第一着の力点をねがう伊藤校長（平成5・1993）



▲建設中の新校舎の前を出発（同右）



▲出発式。仮設教室の向こうに新校舎北館が見える（平成5・1993）



▲校舎の提揚



▲竣工なった新校舎。旧校舎の面影を残す（平成5・1993）

新校舎竣工



▲新校舎の前を踏れ踏れと出発する（平成5・1993）



▲日断の鐘。永遠に



強行遠足の沿革の概要

強行遠足年表

強行遠足事始め

全国体育日

江口俊博校長

江口先生と強行遠足 (嶋田 武)

たわ
撓まずひるまずたじろがず

ー江口先生と私ー (小尾鳩三)

強行遠足沿革



三枝茂雄 画